

首里当蔵旧水路

—龍潭線街路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

2017年（平成29） 2月

那覇市 文化財課

首里当蔵旧水路

—龍潭線街路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

序

本報告書は、沖縄県土木建築部南部土木事務所による「龍潭線街路改良工事」に伴って発掘調査を行った、「首里当麻旧水路」の成果を収めたものです。

本遺跡は那覇市首里当麻町に存し、平成27年10月から平成28年1月にかけて調査が行われました。

調査では、県道29号線沿道に、琉球石灰岩を用いて構築された水路が確認されました。

首里当麻町は、世界遺産「首里城跡」が存するなど、琉球王府時代には、その王都として中心的な役割を担っていました。本遺跡の調査成果は、整備されたかつての街並みが偲ばれるものであり、当該地における都市計画を考える上での契機となるものです。

末尾になりましたが、発掘調査作業ならびに、本報告書を作成するにあたってご協力いただきました関係各位の皆様には、深く感謝申し上げます。

平成29年2月

那覇市長 城間 幹子

例言

1. 本書は、沖縄県土木建築部南部土木事務所（以下、南部土木事務所）による「龍潭線街路改良工事」に伴って、平成27年度に実施された「首里当蔵旧水路発掘調査」の成果を収録したものである。
2. 発掘調査は、那覇市市民文化部文化財課の監督のもと、南部土木事務所と委託契約した株式会社埋蔵文化財サポートシステム（以下、埋蔵文化財サポートシステム）が行った。
3. 第1表は、埋蔵文化財サポートシステムによる遺構観察記録を参考に作成した。
4. 第2図は、2009年（平成21）11月1日付国土地理院発行の那覇市全図（部分）に加筆した。
5. 第3図は、米軍が1947年（昭和22）～1948年（昭和23）に撮影した航空写真をもとに、1949年（昭和24）に作成した地図（縮尺1:4,800）に加筆した。
6. 第4図は、1998年（平成10）3月付那覇市文化局歴史資料室発行の「首里地区旧跡・歴史的地名地図」に加筆した。
7. 第5図は、1994年（平成6）3月付沖縄県教育委員会発行の『琉球国絵図史料集 第三集 一天保国絵図・首里古地図及び関連資料』に掲載の「首里古地図」に加筆した。
8. 第6図は、1988年（昭和63）12月付那覇市税務部資産税課発行の現況・地籍併合図に、埋蔵文化財サポートシステム作成の遺構位置図ならびに首里古地図を重ね合わせ作成した。
9. 第7図は、沖縄タイムス1976年（昭和51）9月23日付「思い出のわが町」掲載の「戦前の当之蔵町民俗地図」をトレースして加筆した。
10. 第8図は、1988年（昭和63）12月付那覇市税務部資産税課発行の現況・地籍併合図に、埋蔵文化財サポートシステム作成の調査地点図を参考に作成した。
11. 第9図～第15図は、埋蔵文化財サポートシステム作成図面を、再構成したものである。
12. 図版1～図版4は、埋蔵文化財サポートシステム撮影写真を、再構成したものである。
13. 第V章は、埋蔵文化財サポートシステム作成の「業務報告書」中の「3.総括」を参照した。
14. 本報告書の執筆は下記の通りである。

樋口 麻子（那覇市市民文化部文化財課主任専門員）第I章～第V章

15. 資料整理は下記のメンバーで行った。

表・図・トレース：国吉 真由美

16. 本書に掲載した発掘調査に関する写真・実測図などの記録は、那覇市市民文化部文化財課にて保管している。

『首里当蔵旧水路』報告書目次

| | |
|-------|-----------------------------------|
| 序 | |
| 例言 | |
| 第I章 | 調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1 |
| 第II章 | 遺跡の位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 |
| | 那覇市の地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 |
| | 遺跡の歴史的・地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 |
| 第III章 | 調査経過と調査組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10 |
| 第1節 | 調査経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10 |
| 第2節 | 調査組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10 |
| 第IV章 | 遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11 |
| 第V章 | 総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29 |

報告書抄録

挿図目次

| | |
|--------|--------------------------|
| 第 1 図 | 那覇市の位置 |
| 第 2 図 | 那覇市内における調査地位置 |
| 第 3 図 | 米軍作成地形図における調査地周辺 |
| 第 4 図 | 首里地区旧跡・歴史的地名地図における調査地周辺 |
| 第 5 図 | 首里古地図における当蔵村 |
| 第 6 図 | 昭和63年現況・地籍併合図と首里古地図重ね合わせ |
| 第 7 図 | 戦前昭和初期の当之蔵町民俗地図 |
| 第 8 図 | 調査域全体平面図 |
| 第 9 図 | 調査地点① |
| 第 10 図 | 調査地点② |
| 第 11 図 | 調査地点④ |
| 第 12 図 | 調査地点⑤ |
| 第 13 図 | 調査地点⑥ |
| 第 14 図 | 調査地点⑦ |
| 第 15 図 | 調査地点⑧ |

挿表目次

| | |
|-------|----------|
| 第 1 表 | 調査地点観察一覧 |
|-------|----------|

図版目次

| | |
|------|-------------|
| 図版 1 | 遺構検出・記録撮影状況 |
| 図版 2 | 調査完了状況 |
| 図版 3 | 調査完了状況 |
| 図版 4 | 調査完了状況 |

第 I 章 調査に至る経緯

- 2013年(平成25)10月30日 南部土木事務所より首里当蔵町地内における龍潭線街路改良工事(電線共同溝埋設工事)に伴って、埋蔵文化財事前審査願が那覇市教育委員会あてに提出される。
- 2013年(平成25)12月13日 埋蔵文化財事前審査報告書(審査番号25-446)にて、申請地の一部に国指定史跡「円覚寺跡」を含むことから、「遺跡あり」との回答を行う。ならびに、工事実施の際には「立会調査」を行うことを要望し、遺跡の状態が良好な場合は、遺跡保存のための調整が必要とした。
- 2014年(平成26)1月～6月 工事進捗に合わせて、断続的に立会調査を行う。その結果、当蔵交差点付近にて水路が確認された。
- 2014年(平成26)7月14日 上記の結果を受け、那市文財第137号「埋蔵文化財予備調査報告(埋蔵文化財包蔵地の新規発見)について」を、沖縄県教育長あてに提出する。
- 2014年(平成26)7月29日 教文第706号「埋蔵文化財包蔵地の新規発見について(回答)」が沖縄県教育長より送付される。遺跡名が「首里当蔵旧水路」と決定され、その範囲が、龍潭から当蔵交差点までとなる。
- 2014年(平成26)8月7日 那市文財第174号「埋蔵文化財包蔵地の周知について(通知)」を南部土木事務所長あてに送付する。当該周辺地域における開発行為に際しての、注意喚起を目的としたものである。
- 2014年(平成26)12月10日 南部土木事務所と那覇市文化財課との間で、協議を行う。その結果、当該地区における工事が、平成27年1月に契約・同年3月着工予定であることを踏まえ、工事開始までに猶予が無いことから、例外的に南部土木事務所が発掘調査業者へ発注・契約を行い、那覇市文化財課が調査監督を担うこととなった。
- 2015年(平成27)3月6日 水路が当蔵交差点の東側に延伸していることが判明し、那市文財第406号「埋蔵文化財予備調査報告(埋蔵文化財包蔵地の範囲など変更について)」を沖縄県教育長あてに提出する。これにより、「首里当蔵旧水路」は、龍潭から首里交番までの範囲となった。
- 2015年(平成27)3月16日 南士第4167号「埋蔵文化財発掘の通知について」を受理し、同年3月19日付那市文財第435号文書にて、県教育長あてに進達した。
- 2015年(平成27)3月24日 教文第2030号「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について(回答)」を県教育長より受け取り、同年3月27日付那市文財第458号として、南部土木事務所長あてに送付した。
- 2015年(平成27)8月4日 南部土木事務所と、埋蔵文化財サポートシステム、那覇市との間で三者協定を締結する。



第1図 那覇市の位置

第II章 遺跡の位置と環境

那覇市の地理的環境

那覇市は、沖縄本島南西部に位置し、北は浦添市、東は西原町・南風原町、南は豊見城市と接し、西は東中国海に面する。面積は 39.23 ㎢、人口 324,113 人（平成 28 年 11 月末現在）を擁する県都である（第 1・2 図参照）。

市域の東側には、標高約 165m の弁ヶ嶽を頂点とする首里台地がある。首里台地は、基盤の島尻層の上に形成された石灰岩段丘からなる。市域の北側には、標高約 30～50m の緩やかな天久台地が、南側には標高約 30～60m の起伏のある小祿台地がある。これらの台地に囲まれ、中央部は標高約 10m の低地となっている。

市域北側に安謝川、中央部に安里川、南側に国場川が東から西方向に流れ、東中国海へと注いでいる。国場側下流域は漫潮と呼ばれ、大きな入江となっていたが、現在は埋め立てられ川幅も狭くなり、その景観は大きく変貌している。

沖縄本島中南部は、第三紀鮮新世島尻層群を基盤層としており、那覇市も同層が基盤である。この層は下位から上位へ豊見城層・与那原層・新里層に細分される。豊見城層は、砂岩と泥岩の互層からなり、下部は泥岩、上部は砂岩が優勢である。小祿から安里方面にかけて分布する小祿砂岩層（通称：ニービ）は、この上部砂岩に属する。

この島尻層を覆っているのが、第四紀更新世琉球石灰岩層であり、首里台地周辺部・山下町周辺部・天久台地などに分布している。

さらに、この石灰岩層を覆っているのが、安謝粘土層である。これは、風化土壌の二次堆積とみられ、那覇港沖（新港埠頭）海底下で最大層厚 11m と特に厚い。陸上の風化土（通称：島尻マージ）と層厚に違いがみられるものの、非常に類似した層である。

那覇市街地からその沖合までの低地には、第四紀完新世堆積物である沖積層が広く分布しており、特に安謝川・安里川・国場川下流域でみられる。

遺跡の歴史的・地理的環境

調査地は、那覇市首里当蔵町1丁目～2丁目に位置し、県道29号線の沿道に存する。この地は、かつての行政区域としては、南風之平等に属する当蔵村であった。南島風土記によれば、「当蔵」の地名は、首里城内の「御タウグラ火神」という拝所にちなんだものではないかと指摘されている。古来、首里城内の下庭御殿の背後にあった厨房を「唐當蔵」といい、これは、冊封使接待に備えたものであったが、のちに廃止された。火神はその名残という。

当蔵村内には、「首里城」が存し、アダン（安谷）川御嶽・あかざ森御嶽・国中城御嶽や、仙江院・天王寺・徳徳院・松岳院・広徳寺・興禪寺・円覚寺・弁財天堂などの寺院があった。このほか、名護按司・伊江按司・豊見城按司・久志按司・大里按司・勝連按司・諸見里御殿・真壁御殿などの士族の邸宅が多く建ち並んでいた（第5図参照）。これらの邸宅は、軒先まで積み上げられた石垣を巡らし、その内側には榎木などが植えられ、屋根よりも高くそびえていたという。

これらの情景を偲ぶせるものとして、国指定名勝「伊江殿内庭園」がある。戦災を逃れた、貴重な庭園である。伊江殿内は、1782年（乾隆47）から1801年（嘉慶6）にかけて三司官を務めた伊江親方朝睦（尚天迪）の邸宅であった。庭園内の岩には、「巢雲」「漱石山房」「常」「喜」の陽刻文字が

施されている。このうち「巢雲」「漱石山房」の文字は、1800年（嘉慶5）に来琉し同邸を訪れた、冊封正使趙文楷ならびに・副使李鼎元による筆跡を写したものとされている。

当蔵村の東側には、蓮小堀と呼称される池があった。これは、尚巴志王代に、首里城整備のために土を掘り出した跡が池になったとの伝承がある。蓮小堀の近くに第一尚氏の菩提寺である慈恩寺があり、蓮小堀に架かる橋は、慈恩寺橋と称されていた。この橋は、1661年（順治18）、龍潭に移築され世持橋と改称された。

蓮小堀の北に位置する天王寺は、円覚寺・天界寺と並ぶ尚氏の靈廟の一つである。国王も参詣する重要な寺院であった。天王寺の門前を東西に伸びる道（現県道29号線）が村の大通りであり、王府時代から明治中期頃までは、旧暦6月に綱引きが催された。この沿道一帯に、按司・御殿の邸宅が建ち並んでいたが、明治頃から、文房具屋・米屋・時計屋・写真屋などの商店街へと変貌した。

1879年（明治12）に、沖縄県所属となる。1880年（明治13）、当蔵村役場が置かれ、県の直接管轄となった。1896年（明治29）、郡区編制が公布され首里区の字となり、1908年（明治41）頃、興禅寺跡に区役所が移転し、後に首里市役所となった。

当該地には、学校も多く存した。1801年（嘉慶6）、龍潭東端に、琉球王府における最高教育機関である「国学」が移転した。それに続き、村学校となる立基館が設立される。明治以降には、沖縄県師範学校（現在の県立芸術大学敷地内）をはじめ、附属小学校・県立工業学校が設立された。また、首里城内に存した県立女子工芸学校・首里第一尋常高等小学校（現在の市立城南小学校前身）などがある。近隣には、首里高等小学校（現在の首里城公園管理センター付近）、沖縄県立中学校（現在の県立首里高等学校）、首里尋常高等小学校女子部（首里第二尋常高等小学校・現在の市立城西小学校）などがあつた。

第二次世界大戦により一帯は荒廃したが、1950年（昭和25）に琉球大学が創設され、円覚寺総門や弁財天堂などが復元された。1982年（昭和57）、琉球大学は西原町・中城村へと移転し、現在は、県立芸術大学が存している。

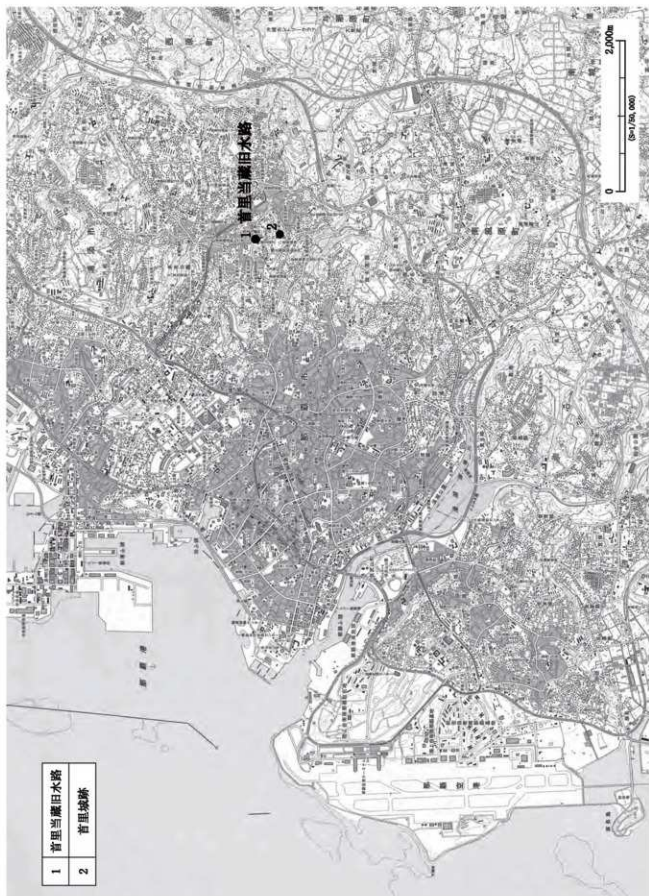
参考・引用文献

那覇市の地理的環境

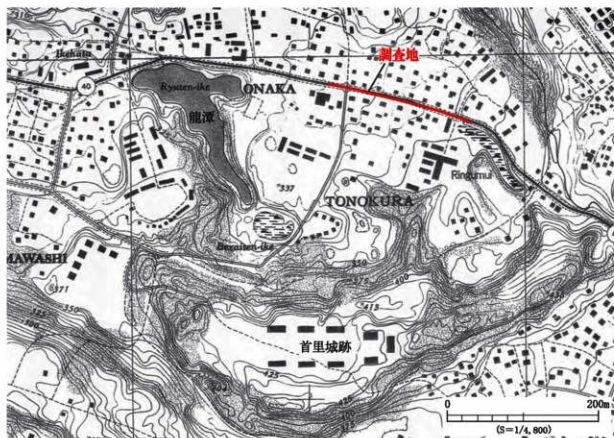
- 古川博恭 「第一章 古那覇の自然 第一節 地形・地質 一 地形」『那覇市史 通史編 第1巻』
那覇市企画部文化振興課 那覇市役所 1985
- 古川博恭 「Ⅲ 島の地質誌 ⅢB 中琉球 8 沖縄島南部」『琉球弧の地質誌』木崎甲子郎
沖縄タイムス社 1985
- 古川博恭・高里良政 「三、地形・地質 （一）那覇市の土地の成り立ち」
『那覇市歴史地図 -文化遺産調査報告書-』 那覇市教育委員会 1986
- 「総論 自然環境」『日本歴史地名体系第四八巻 沖縄県の地名』有限公司 平凡社地方資料センター
株式会社 平凡社 2002
- 「沖縄県中南部域の地質」『沖縄県史図説編 県土のすがた』（財）沖縄県文化振興会
沖縄県教育委員会 2006

遺跡の歴史的・地理的環境

- 「當ノ蔵」『南島風土記』 東恩納寛惇 沖縄郷土文化研究会 1950
- 「思い出のわが町」(24) 当之蔵町 沖縄タイムス 1976.9.23 記事



第2図 那覇市内における調査地位置



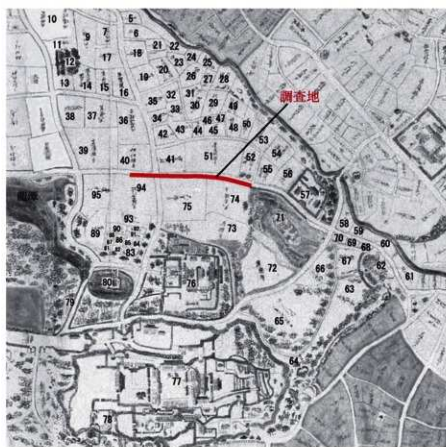
第3図 米軍作成地形図における調査地周辺



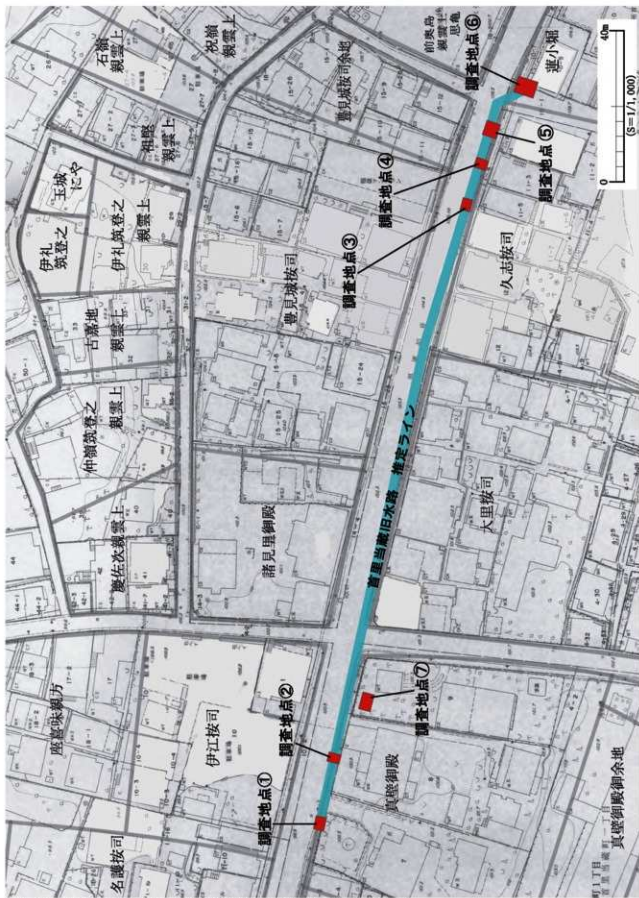
第4図 首里地区旧跡・歴史的地名地図における調査地周辺

当蔵村

- | | | | |
|----------------|----------------|--------------|-----------------|
| 1 渡慶次筑登之親雲上 | 20 中城御殿玉城あむしられ | 39 名護按司 | 58 男山戸 |
| 2 大山同地 | 21 前高宮城親雲上真蒲戸 | 40 伊江按司 | 59 男まつ |
| 3 田場親方余地 | 22 新川請地 | 41 諸見里御殿 | 60 次ら |
| 4 奥間にや | 23 仲井真 | 42 慶佐次親雲上 | 61 石川筑登之親雲上 |
| 5 男五ら | 24 新川請地 | 43 仲嶺筑登之親雲上 | 62 あかす森御嶽 |
| 6 嘉島 | 25 佐南親雲上余地 | 44 古嘉地親雲上 | 63 湛道西堂 |
| 7 与儀筑登之親雲上 | 26 佐南親雲上 | 45 伊礼筑登之親雲上 | 64 国中城御嶽 |
| 8 前川親雲上 | 27 新川請地 | 46 伊礼筑登之 | 65 中城御殿大里ノあむしられ |
| 9 田場親方 | 28 新川請地 | 47 玉城にや | 66 伍徳院 |
| 10 大山親雲上 | 29 新川親雲上 | 48 祖堅親雲上 | 67 松岳院 |
| 11 称覇親雲上 | 30 田頭筑登之親雲上 | 49 大里按司あむしられ | 68 北谷御殿あむしられ |
| 12 アダン川御嶽 | 31 前田頭親雲上 | 50 石嶺親雲上 | 69 □□親雲上 |
| 13 男五ら | 32 座間味親雲上 | 51 豊見城按司 | 70 山田子 |
| 14 牧志筑登之親雲上思戸金 | 33 前島袋親雲上 | 52 豊見城按司余地 | 71 蓮小堀 |
| 15 吉永親雲上 | 34 糸数筑登之親雲上 | 53 祝嶺親雲上 | 72 広徳寺 |
| 16 平田筑登之親雲上 | 35 糸数親雲上 | 54 前奥松親雲上後家 | 73 興禪寺 |
| 17 屋部親雲上 | 36 座喜味親方 | 55 前奥島親雲上思亀 | 74 久志按司 |
| 18 河平筑登之親雲上 | 37 真栄里 | 56 仙江院 | 75 大里按司 |
| 19 田島親雲上 | 38 大宜見親雲上 | 57 天王寺 | 76 円覚寺 |



第5図 首里古地図における当蔵村



第6図 昭和63年現況・地籍併合図と善里古地図を重ね合わせ

波名喜穂「第一章 社会生活 第一節 各区域の概況 一 旧首里 (三) 南風平等・當蔵町」

『那覇市史 資料編 第2巻中の7 那覇の民俗』 那覇市企画部市史編集室 1979

「あかず森」『沖縄古語大辞典』『沖縄古語大辞典』編集委員会 株式会社角川書店 1995

「首里当蔵町」「首里三平等」「当蔵」「蓮小堀」

『角川日本地名大辞典 47 沖縄県』『角川日本地名大辞典』編纂委員会 角川書店 1986

『明治・大正・昭和 沖縄県立学校寫真帖』 我部政男・宮城保 那覇出版社 1987

「南風之平等」「当蔵村」「蓮小堀跡」「天王寺跡」

『日本歴史地名大系第四八巻 沖縄県の地名』 有限会社 平凡社地方資料センター

株式会社 平凡社 2002

『名勝 伊江殿内庭園』『名勝 伊江殿内庭園2』 那覇市教育委員会 2007

第三章 調査経過と調査組織

第1節 調査経過

2015年(平成27)8月に南部土木事務所・埋蔵文化財サポートシステム・那覇市による業務契約を締結し、同年10月、現場作業に着手した。

調査は、埋蔵文化財サポートシステムが行い、その調査監督を那覇市文化財課が行った。

調査対象地点の掘削は、工事施工者である株式会社屋部土建(以下、屋部土建)が行い、遺構を確認した時点で、埋蔵文化財サポートシステムによる遺構清掃・調査を行った。調査完了後、屋部土建へ現場を引き渡し、埋戻し作業を行った。

調査は、工事進捗に合わせ、断続的に行われた。

第2節 調査組織

本遺跡の調査組織は次の通りである。

| | | | | |
|------|---------|---------|-------|-----------------|
| 事業主体 | 那 覇 市 | 市 長 | 城間 幹子 | (平成26年度～平成28年度) |
| 事業所管 | 文 化 財 課 | 課 長 | 古塚 達朗 | (平成15年度～平成27年度) |
| | ” | 課 長 | 岸本 修 | (平成28年度) |
| 調査総括 | 文 化 財 課 | 副 参 事 | 島 弘 | (平成19年度～平成28年度) |
| 調査事務 | 文 化 財 課 | 副 参 事 | 島 弘 | (平成19年度～平成28年度) |
| ” | ” | 主 幹 | 内間 靖 | (平成21年度～平成28年度) |
| ” | ” | 主 査 | 新里 清美 | (平成25年度～平成27年度) |
| ” | ” | 主 査 | 神谷 明美 | (平成28年度) |
| ” | ” | 主 任 主 事 | 高嶺 朝美 | (平成27年度～平成28年度) |

| | | | |
|-----|------|-------|--------|
| 調査員 | 文化財課 | 副参事 | 島 弘 |
| 〃 | 〃 | 主 幹 | 内間 靖 |
| 〃 | 〃 | 専門員主査 | 玉城 安明 |
| 〃 | 〃 | 専門員主査 | 仲宗根 啓 |
| 〃 | 〃 | 主任専門員 | 樋口 麻子 |
| 〃 | 〃 | 主任専門員 | 當銘 由嗣 |
| 〃 | 〃 | 主任学芸員 | 安斎 真知子 |
| 〃 | 〃 | 学 芸 員 | 吉田 健太 |

発掘調査 株式会社 埋蔵文化財サポートシステム

資料整理 文化財課 資料整理員 国吉 真由美

第IV章 遺構

遺構周辺の土層は、現代の水道管などの埋設工事の際に攪拌されており、本来の堆積土は確認されなかった。埋設工事の際に遺構際まで掘り込まれ、かろうじて遺構が残された状態である。

個々の遺構の詳細については、第1表ならびに第9図～第16図を参照されたい。

遺構は、石灰岩で構築されていた。敷石を設置後、側壁の石積を施工している。積み方は、相方積・平積などが見受けられた。水路の平均高は約70cm、幅は約50cmである。

敷石面には、ヘドロの堆積が認められた。調査時においても僅かながら水流があり、現代遺物が混在していた。

今回の調査においては、遺構に伴う遺物は、得られなかった。

また、調査地点①から⑥にかけては水路の遺構であるが、⑦は水路の延長上から外れており、別に属する遺構であると考えられる。この遺構は、高さ約10cm、幅約15cmであり、形状から溝と判断される。首里古地図によると当該地に「真壁御殿」の邸宅があり（第5図中94）、この屋敷に付随する施設である可能性が高い。首里当蔵旧水路に連結していた可能性もある。

第1表 調査地点観察一覧

| 押図番号 図版番号 | 調査地 | 残存状態 | 高さ (cm) | 幅 (cm) | 備考 | |
|----------------|-------|------|---------|--------|----|--|
| 第9図 図版2 | 調査地点① | 敷石面 | 3/1残存 | — | 60 | 東側のみ残存。板状に平坦に切出加工した石材を組合わけて石畳状に並べ、石材間の隙間が無くなるように配置されている。調査区域外へ伸びる。 |
| | | 北側壁面 | 一部残存 | 20 | — | 1/3残存。東側に切石2段残存。* 図面なし。 |
| | | 南側壁面 | 良好 | 60 | — | 北側壁面に比して、良好な状態。切石4段積み構造で、内部表面は、面揃いとなるように表面加工が成されている。 |
| 第10図 図版2 | 調査地点② | 敷石面 | 良好 | — | 60 | 板状の石材を石畳状に配置し、敷き詰めている。 |
| | | 北側壁面 | 良好 | 60 | — | 残存状況は良好。切石2〜3段積み構造。内部表面は、面揃いとなるように表面加工が成されている。 |
| | | 南側壁面 | 良好 | 60 | — | 残存状況は良好。石材の加工については、北側と同様。切石3段積み構造。 |
| 図版3 | 調査地点③ | — | — | — | — | 埋設管工事などによって、水路が消失したとみられ、遺構は確認されなかった。 |
| | | — | — | — | — | |
| | | — | — | — | — | |
| 第11図 図版3 | 調査地点④ | 敷石面 | 不明 | — | 45 | 流水及び滲水の為、状況観察できず。 |
| | | 北側壁面 | 一部破損 | 65 | — | 一部が工事によって破壊しており、土壌が詰められていた。切石4段積み構造。 |
| | | 南側壁面 | 良好 | 60 | — | 残存状況は良好。北側のような工事影響は、確認されない。切石4段積み構造。 |
| 第12図 図版3・4 | 調査地点⑤ | 敷石面 | 一部残存 | — | — | 調査地点においては、消失。 |
| | | 北側壁面 | 一部破損 | 80 | — | 埋設管工事によって、石積を撤去したとみられる。東側は石積消失。切石4段積み。 |
| | | 南側壁面 | 残存無し | — | — | コンクリート構造物によって、基礎部分まで失われている。 |
| 第13図 図版4 | 調査地点⑥ | 敷石面 | 部分的に破損 | — | 60 | 西側は消失しているが、東側は残存。板状に加工した石材を石畳状に配置、敷き詰めている。 |
| | | 北側壁面 | 部分的に破損 | 80 | — | 調査区の石積残存状況は良好だが、東西部は破損している。東側は、擾乱土砂が堆積しており、首里交番建築工事の際に消失した可能性がある。西側は、コンクリート製構造物があり、その工事の際に消失したとみられる。15cm×25cm大の切石4段積み。 |
| | | 南側壁面 | 部分的に破損 | 80 | — | 西側は、石積が水路内部へ傾斜しており、大型掘削機械などによる影響と考えられる。15cm×25cm大の切石4段積み。 |
| 第14・15図 図版4 | 調査地点⑦ | 敷石面 | 良好 | — | 15 | 残存状況は良好。板状の石材を石畳状に配置し、敷き詰めている。 |
| | | 北側壁面 | 良好 | 10 | — | 長方形に加工した石材を、1段配置。背面側に大型の石材が並行して配置されており、建物の基礎を構成していたと思われる。 |
| | | 南側壁面 | 良好 | 10 | — | 北側壁と同様な石材を、配置。 |

U-24460.0
0 00122-A
X=24460.0
00 3-0002 100

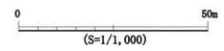
0 00122-A
X=24460.0

X=24330.0
0 00122-A
Y=24370.0

X=24330.0
0 00122-A

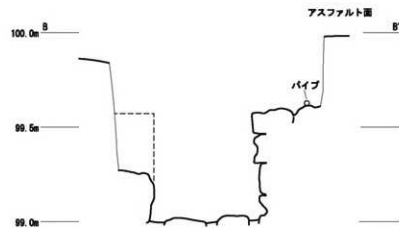


- : 首里当蔵旧水路 調査地点
- : 首里当蔵旧水路 推定ライン

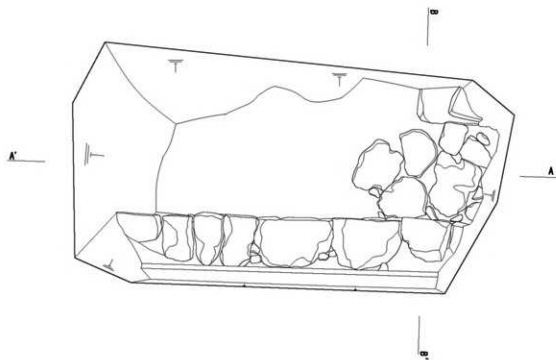


第 8 図 調査域全体平面図

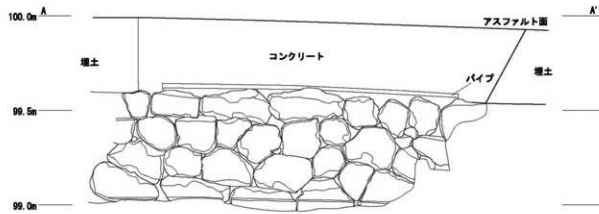
X-24397.0
 0 10.000m
 0 10.000m



断面図

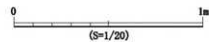


平面図

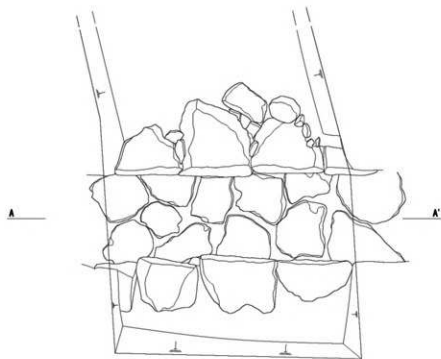


南側壁面 立面図

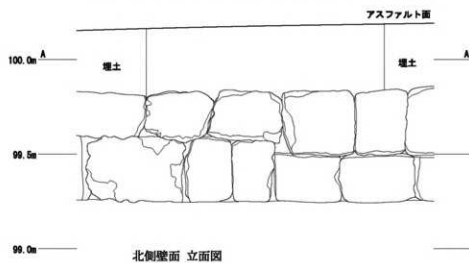
X-24394.0
 0 10.000m
 0 10.000m



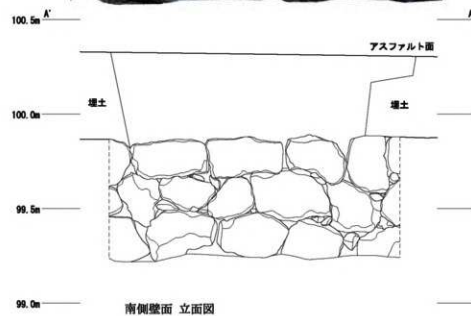
X=24394.0
Y=99812.0



平面図

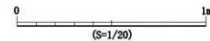


北側壁面 立面図



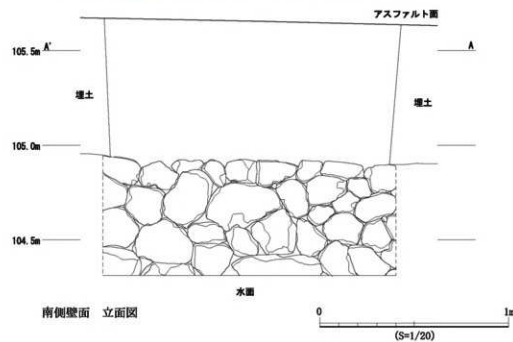
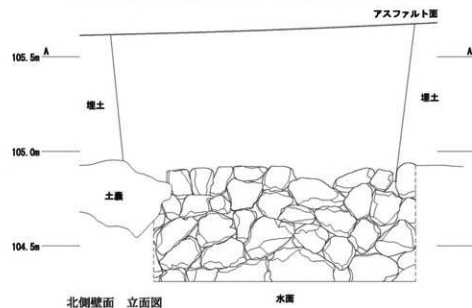
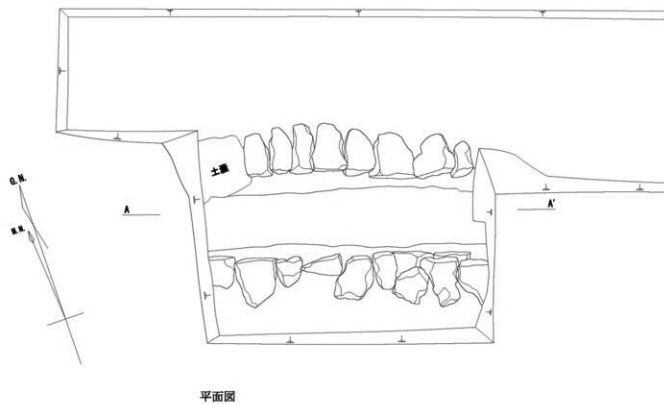
南側壁面 立面図

X=24391.0
Y=99812.0



第 10 図 調査地点②

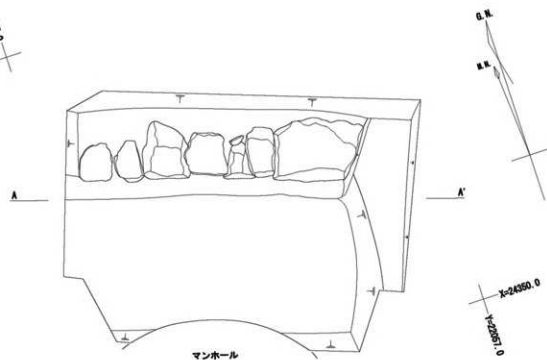
Y=24352.0
X=24355.5
S=1/20



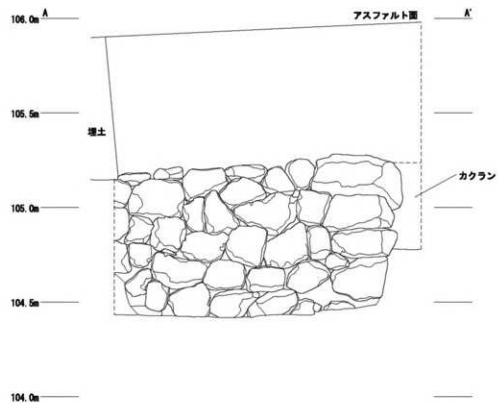
第 11 図 調査地点④



X=24352.0
Y=13500.0
0 10m

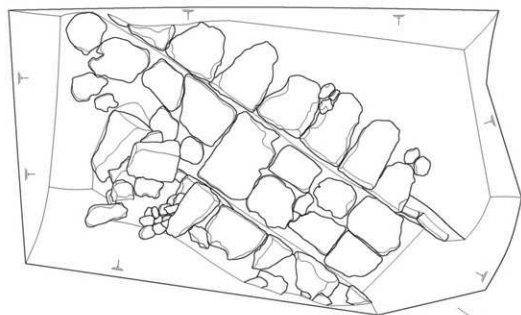


平面図

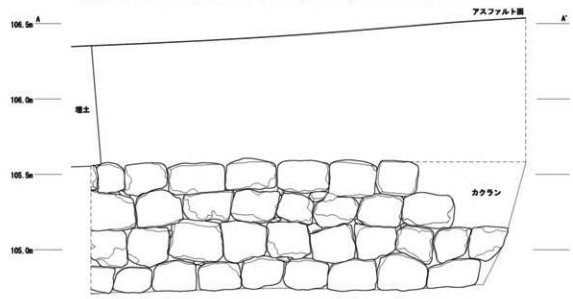
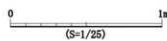


北側壁面 立面図

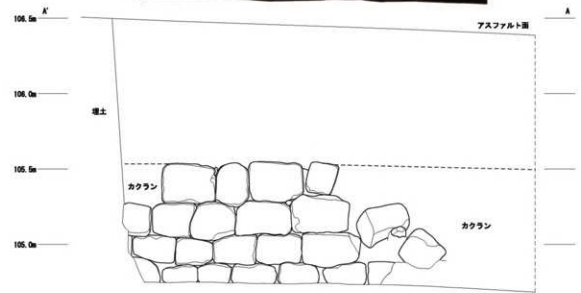
0 1m
(S=1/20)



平面図



北側壁面 立面図



南側壁面 立面図

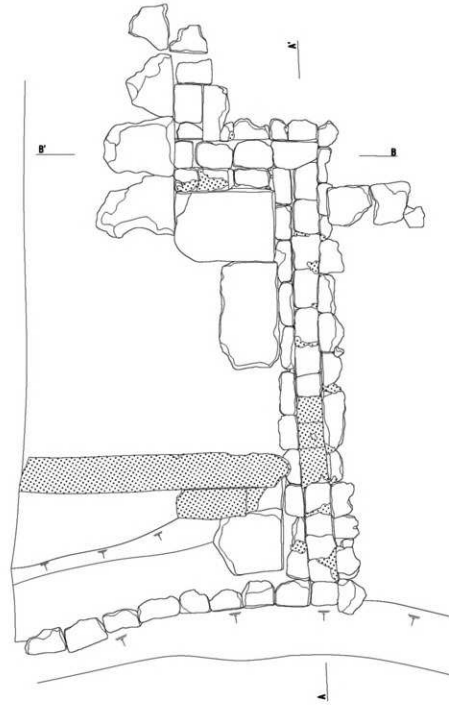
第 13 図 調査地点①

第 14 图 調査地点⑦ 平面図



Y=21909.0
X=43284.5

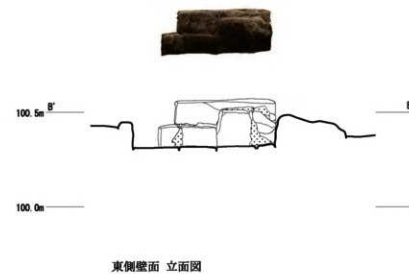
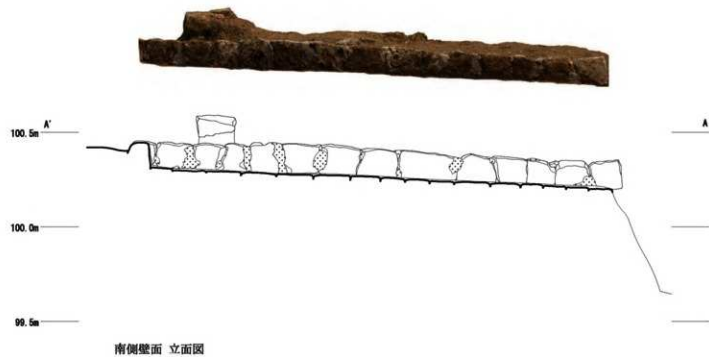
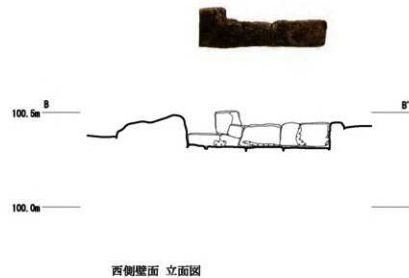
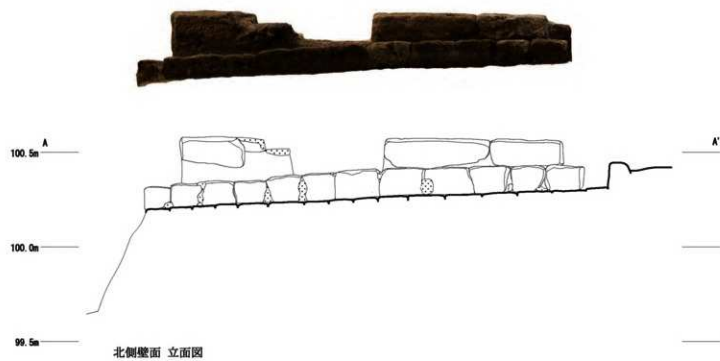
Y=21905.0
X=43284.5
N
S



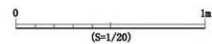
Y=21905.0
X=43284.0

: 瓦片跡

0 1m
(S=1/200)



モルタル



第 15 図 調査地点⑦

第V章 総括

本遺跡は、那覇市首里当蔵町1丁目～2丁目内の県道29号沿線に存する水路跡である。琉球石灰岩を用いて、水路敷石・側壁が構築されている。構築技法は、まず、敷石を並べ、その後、側壁の石を積み上げていく。相方積み・平積みを用いているが、経年劣化によるものか若干の空隙がある。平均高は約70cm、幅約50cmである。

発見時にはコンクリート製の蓋が被せられていたが、これは、後世のものと考えられ、築造時の蓋の有無に関しては判然としない。当初は、蓋が無かった可能性もある。遺構周辺にて行われた埋設管工事などによって遺構跡まで攪拌されているため、元来の土層は確認できなかった。確定的な相伴遺物も得られず、明確な構築年代は不明である。

本遺跡は県道29号沿線に位置しているが、この沿線東側には「蓮小堀」が、西側には「龍潭」がある。いずれも、人工池である。「蓮小堀」が水路上流に、「龍潭」が下流となる。「蓮小堀」は現在埋め立てられており、那覇市立首里公民館・図書館付近に該当する。水路は、「蓮小堀」に接続していたと推測され、ここを起点に首里交番付近にて西方向に屈曲し、「龍潭」へと流れる。この二地点を結ぶものであったと考えられる。

水路が確認されたのは、沿道南側のみであり、北側においては、確認されていない。

また、調査地点⑦については、水路の路線から外れており、構造が異なることから、別遺跡の遺構であると考える。首里古地図によると、この地点に真壁御殿の邸宅があり、これに関連した遺構である可能性が高い(第5・14・15図参照)。溝状の遺構であることから排水施設と考えられ、水路へ接続していた可能性もある。本遺跡には属さない可能性が高いが、今回の調査中に検出されていることから、本報告中に収めるものである。

首里当蔵町は、「首里城」の近接地であり、かつては多くの寺院や士族の邸宅が立ち並ぶ一帯であった。当時は、閑静な地であったと想像されるが、現在は開発が進み、交通量も多く、大勢の観光客が往来している。一見すると、往時の姿は消え去ったようであるが、地下には、その痕跡が残されている。

同町内においては、本遺跡以外の地点において、近世の屋敷跡や、グスク時代の土層が確認されている。これらは限定的であり、現段階では、それぞれの「点」に過ぎない。往時の当蔵村の全容解明にはいまだ及ばないが、各「点」のデータを集積し、当蔵村の、また、それ以前の首里の姿の解明に繋がることを願っている。

参考文献

- 「五番 486」『氏集 首里 那覇』那覇市史 資料篇 第1巻5 企画部市史編集室 那覇市役所 1976
「真壁」『沖縄県姓氏家系大辞典』沖縄県姓氏家系大辞典 編集委員会 株式会社角川書店 1992

圖 版



図版 1 遺構検出・記録撮影状況

- 1 段目左：調査地点①
- 2 段目左：調査地点①
- 3 段目左：調査地点②
- 4 段目左：調査地点②

- 1 段目右：調査地点④
- 2 段目右：調査地点⑤
- 3 段目右：調査地点⑥
- 4 段目右：調査地点⑦



図版2 調査完了状況

- 1 段目左：調査地点① 南より
- 2 段目左：調査地点① 西より
- 3 段目左：調査地点① 北より
- 4 段目左：調査地点① 東より

- 1 段目右：調査地点② 南より
- 2 段目右：調査地点② 西より
- 3 段目右：調査地点② 北より
- 4 段目右：調査地点② 東より



図版3 調査完了状況

- 1 段目左：調査地点③ 南西より
- 2 段目左：調査地点③ 南東より
- 3 段目左：調査地点④ 南より
- 4 段目左：調査地点④ 西より

- 1 段目右：調査地点④ 北より
- 2 段目右：調査地点④ 東より
- 3 段目右：調査地点⑤ 南より
- 4 段目右：調査地点⑤ 西より



図版 4 調査完了状況

- | | |
|------------------|------------------|
| 1 段目左：調査地点⑤ 北より | 1 段目右：調査地点⑥ 東より |
| 2 段目左：調査地点⑤ 東より | 2 段目右：調査地点⑦ 南より |
| 3 段目左：調査地点⑥ 南西より | 3 段目右：調査地点⑦ 北西より |
| 4 段目左：調査地点⑥ 北東より | 4 段目右：調査地点⑦ 東より |

報 告 書 抄 録

| | | | | | | | | |
|---------------------------|---|-----------------|--|--|--|-----------------------|------|------------------------------|
| ふりがな 書 名 | しゅりやうのくらまやうすいる 首里当蔵旧水路 | | | | | | | |
| 副 書 名 | 龍潭線街路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 | | | | | | | |
| シ リ ー ズ 名 | 那覇市文化財調査報告書 | | | | | | | |
| シ リ ー ズ 番 号 | 第104集 | | | | | | | |
| 編 著 者 名 | 樋口麻子 | | | | | | | |
| 編 集 機 関 | 那覇市市民文化財部文化財課 | | | | | | | |
| 所 在 地 | 〒900-8585 沖縄県那覇市泉崎1-1-1 ☎098-917-3501 | | | | | | | |
| 発 行 年 月 日 | 2017年(平成29) 2月 28日 | | | | | | | |
| ふりがな 所 取 遺 跡 名 | ふりがな 所 在 地 | コード 市町村 遺跡番号 | | 北緯 〇 〇 ° | 東経 〇 〇 ° | 調査 期 間 | 調査面積 | 調査原因 |
| しゅりやうのくらまやうすいる 首里当蔵旧水路 | おきなわけん 沖縄県 なはし 那覇市 しゅりやうのくらまやうすいる 首里当蔵町 | 47201 | | 26° 12' 55" ～ 26° 13' 00" (世界測地系) | 127° 43' 11" ～ 127° 43' 22" (世界測地系) | 20151014～ 20160107 | 約30㎡ | 龍潭線街路 改良工事に 伴う発掘調 査 |
| 所取遺跡名 | 種 別 | 主要な時代 | | 主要な遺構 | | 主要な遺物 | 特記事項 | |
| 首里当蔵旧水路 | 水 路 | 近代? | | 水路 | | - | | |
| 要 約 | 本書は、沖縄県南部土木事務所による龍潭線街路改良工事に伴って発掘調査を行った「首里当蔵旧水路」の発掘調査報告書である。調査においては、琉球石灰岩を用いて構築された水路が確認された。遺構跡まで現代の埋設管工事によって攪拌されており、明確な構築年代は不明である。 | | | | | | | |

那覇市文化財調査報告書第104集

首里当蔵旧水路

-龍潭薬街路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告-

発行 2017年(平成29)2月28日
那覇市
〒900-8585 沖縄県那覇市泉崎1-1-1

編集 那覇市市民文化部文化財課
TEL 098-917-3501
FAX 098-917-3523

印刷 有限会社 シーエービー inc.
〒900-0003 沖縄県那覇市安謝1-15-1
パークサイド美清^{ミホ}203号
TEL 098-867-2866
FAX 098-867-2858
